

料の中から求める情報のすべてを提供することは不可能である。そこで、いかにして求める資料や情報をスムーズに入手できる環境を整えていくのかを話し合った。

今回のディスカッションでは、長野県内の病院図書室担当者が集まり、一部ではあるが、図書室業務や文献入手の現状を知ることができた。



まずは、病床数700床程度の大きな病院では、専任の司書も在室しており、文献に必要な情報源の設備も整っている。つまり、利用者からの申し込みにスムーズに対応できる環境である。自室にない文献の依頼先としては、日赤図書室協議会、病院図書室研究会、近畿病院図書室協議会、大学などがある。料金は依頼先によってさまざまであり、文献入手にかかった費用は個人負担であるのが現状である。

次に、病床数300床程の図書室の現状はというと、専任として図書室業務を行っているのではなく、医局や総務の担当者が兼務して行っているために、利用者からの申し込みにスムーズに対応できてはいない。所蔵資料にも限界があり、目録の整備も不十分である。文献入手のシステムについても、情報不足であるために、利用者への情報提供も思うように行われていないのが現状である。

以上のことから、文献入手をスムーズに行うためには、まず自室の図書室の環境を見直すことやネットワークなどの自助努力を行うことが大切なのではないかと考える。

現在、長野県内の病院図書室では「長野県医学図書ネットワーク（仮称）」設立に力を入れている。このネットワークの設立で、情報交換できる場をつくり、図書室担当者の知識を豊かにすることで、利用者が求める文献入手にも迅速に対応できるのではないかとと思われる。

（文責：石坂 理恵／長野赤十字病院）

グループ3 臨床研修医制度と病院図書館

臨床研修医制度と病院図書館について、参加者の所属から研修医を送り出す側と受け入れる側、その環境に必要な物、協議会としてできることは何であるかという点でディスカッションを行った。

病院図書室と研修医の現状：研修医に対する図書室利用オリエンテーションについては、司書が任されてはいるもののなかなか実施できていなかったり、指導医が研修医に簡単な説明をする程度である。その際も、“書誌事項”などの基本的なことから指導が必要な場合もある。

病院図書室の対応：インターネット環境の整備やJDream・医中誌 Web などの文献検索ツールの導入を行い、研修医が自ら資料を探せる環境を整えつつある。ただ、文献検索ツールなどの環境を整えることは病院図書館にとって大きな負担となるにも関わらず、あまり利用されないこともある。

大学の現状：学生は高年次・大学院にならないと論文を書かない傾向がある。また、国公立大学などでは実習が中心で卒論を提出しなくてもよいという学科も多く、文献と接する機会が少ない。

大学のカリキュラム：図書館を利用するような課題やカリキュラムを組むようにすることで、できるだけ学生に図書館を利用するようにもっていく。

病院図書室でできること：第22回医学情報サービス大会での天野氏の発表¹⁾のように、病院図書室は資料・データベースを持つべきであり、オリエンテーションを行うべきである。発表されたアン

ケートによると、オリエンテーションを行っている病院は半数以上の59%であった。

オリエンテーションに対する病院の認識：病院図書室としては「すでに行われているもの」として考えられてきたが、やってくる研修医は文献の存在や書誌事項からすらわからない状況であることが多い。

オリエンテーションの大学側の現状：1年次に行くだけで高年次の学年には行く機会がない。1年生には情報学の一環として授業で行う場合もあるが、大学によってはオリエンテーションで終わる場合もある。オリエンテーションでは書誌事項・1次資料・2次資料などの基本事項から教えるが、割り当てられる時間数が少なく、なかなか短時間ですべてを説明することは難しい。夏休み前にオリエンテーションを受けたり、課題を与えられたりして図書館に来る学生もいるが、全体の2割程度である。

病院における文献検索・入手の現状：ドクターや研修医自身に文献検索をする時間がないため、図書館員やMRが検索をして結果を提供したりしている。現在、MRは自社製品に関する文献は提供することができ、これが8割近くを占めている。これは、オンライン検索で全文にたどり着ける場合もあるが、図書室には頼まずに、MRが提供する文献で済ませてしまうドクターが多いことを示している。また同時にこのことは、図書室側が検索環境を整備してもあまり利用されていないことをも示していると思われる。ドクターは、自分が論文を書く場合には文献を検索するが、臨床の場合は手っ取り早く知っている人に聞いて解決してしまうことが多い。研修医については文献に対する調査・検索方法などがわからずに、指導医に与えられた文献のみで済ませてしまうことが多い。

文献需要の現状：オンラインジャーナルの登場で増えているのは確かであるが、実際に熟読する論文の数は変わらないと思われる。PubMedの利用が非常に増えているが、これは検索して抄録と図表だけに目を通して全文を読まずに終わってしまうケースがあるためと思われる。

オリエンテーションのテクニック：大人数でのオリエンテーションでは、足並みを揃える必要があるが反響が大きく、また実習形式にするとより受け入れられやすい。

大学のできること：医学系大学図書館は、研修医を輩出する立場として恥ずかしくないよう最大限のことはする必要がある。文献に対する基本的知識・技術と応用できる力を身につけさせたい。そうすることにより、文献に対して少なくとも「どう探していいか」わからないということとはなくなるだろう。具体的な例としては、英文の論文を読んだり、早いうちから医学論文に慣れさせることのできるカリキュラムを組むようにすることなどである。

協議会のできること：研修医制度ができてから大学でのオリエンテーションが増えてはいるが、大学や卒業年次によって教えられていることのレベルが異なる場合もあるので、協議会の中での標準的なオリエンテーションが必要なのではないだろうか。

まとめ：病院が何を必要としているのか、また、大学の実情はどうなっているのかなど、お互いに情報を交換することが重要であり、そのような場として協議会活動が活用できればよいのではないかと考えられる。



参考文献

- 1) 天野いづみ, 井指喜代江, 望月雅子: 新臨床研修制度における病院図書室の支援. 医学情報サービス研究大会抄録集. 2005 ; 22月号 : 22

(文責：立道 勉/株サンメディア)